

那箸にて大切の皿を挿み、海にて濯ひしといふも、又妄言ならじ、或人の説に、料理の始りは魚名公の男四條中納言政具卿より庖丁起れり、爰を以て四條流などいへる、別て傳授とするは、五魚三鳥也、五魚とは、鯉、鯛、鰯、眞那鰐、鱸也、三鳥とは、鶴、雁、雉子にして、各作法有て、又料理の調味少なからず。

〔古今著聞集十八〕滋井入道○藤原實教宰相中將にて侍ける時、梶井宮にまいりけるに盃酌有けり、終座に成て宰相中將、今は柚まいらばやと侍ければ、すなはち參らせたりけり、或上達部經家卿八柑七とこと葉をつがひて、八にきりたりけるを、宰相中將見て、あしく切つる物かなと思ひて、ともかくもいふことなかりけり、宮も御覽じて、何とも仰られざりけり、とばかり有て行算まいれやと仰られければ、等身衣にかりばかま著たるさぶらい法師のみめよくつきぐしげなるまいりたり、その柚きりてまいらせよと仰られければ、こしより包丁刀をぬきたりけり、まづ興有てぞ見へける、ぞんする所きりてまいらせたりければ、宮以下入興有けり、くだんの行算さゑもんばうは、行孝が弟也けり、其げい舍兄にもはぢざりけるとぞ、柚をば三切にぞ切たる、をよそ柚をきることは、盃酌至極の時の肴物也、盃を取人必ず三度呑事にて侍とや。

〔徒然草七〕園の別當入道○藤原基氏はさうなき庖丁者也、或人のもとにていみじき鯉をいだしたりければ、皆人別當入道の庖丁をみばやとおもへども、たやすくうち出んもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、此程百日の鯉をきり侍るを、今日かき侍るべきにあらず、まげて申請んとてきられける、いみじくつきぐしく興有て、人ども思へりけると、ある人北山太政入道殿公經○藤原にかたり申されたりければ、かやうの事おのれはよにうるさく覺ゆるなり、きりぬべき人なくばたべ、さらんといひたらんはなほよかりなん、何條百日の鯉をきらんぞとの給ひたりしをかしくおぼえしと、人のかたり給ひけるいとをかし、